RAPID W 週報
Weekly Report on Aomori Prefectural Infectious Disease
青森県感染症発生情報　（2006 年第 9 週）
発行　青森県感染症情報センター（2006 年 3 月 10 日）
（青森県環境保健ｾﾝﾀｰ内:担当　微生物部）
TEL　017-736-5411、 FAX　017-736-5419
青森県環境保健センターホームページ
http://www.pref.aomori.lg.jp/eiken/index.html

Ⅰ　第 9 週の発生動向（2006/2/27～2006/3/5）

1. 咽頭結膜熱は、**むつ保健所管内**で警報が出されました。
2. 伝染性紅斑は、**弘前保健所管内**で引き続き警報が出されています。
3. 流行性耳下腺炎は、**むつ保健所管内で**引き続き**注意報**が出されています。

Ⅱ　第 9 週五類感染症定点把握

保健所名	青森		弘前		八戸		五所川原		上十三		むつ		青森県計		増減数
疾患番号・疾患名	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	(前週からの増減)
(72) インフルエンザ	100	7.14	72	4.80	33	2.36	28	4.00	87	9.67	41	6.83	361	5.55	-140
(60) 咽頭結膜熱			1	0.11							4	1.00	5	0.12	-2
(61) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	16	1.78	19	2.11	7	0.78	2	0.40	2	0.33	1	0.25	47	1.12	-9
(62) 感染性胃腸炎	50	5.56	90	10.00	25	2.78	8	1.60	37	6.17	18	4.50	228	5.43	52
(63) 水痘	9	1.00	19	2.11	13	1.44	5	1.00	5	0.83	13	3.25	64	1.52	-1
(64) 手足口病					2	0.22							2	0.05	1
(65) 伝染性紅斑	6	0.67	26	2.89	6	0.67	6	1.20					44	1.05	-7
(66) 突発性発しん	3	0.33	7	0.78	10	1.11	1	0.20	3	0.50	2	0.50	26	0.62	3
(67) 百日咳															0
(68) 風しん															0
(69) ヘルパンギーナ			1	0.11									1	0.02	-1
(70) 麻しん（成人を除く）															0
(71) 流行性耳下腺炎	10	1.11	1	0.11	4	0.44	9	1.80	10	1.67	12	3.00	46	1.10	-16
(73) 急性出血性結膜炎															0
(74) 流行性角結膜炎							1	1.00	1	0.50			2	0.18	0

定点数					
保健所名	インフルエンザ（内科＋小児科）	小児科	内科	眼科	基幹
青森	14	9	5	2	1
弘前	15	9	6	3	1
八戸	14	9	5	2	1
五所川原	7	5	2	1	1
上十三	9	6	3	2	1
むつ	6	4	2	1	1
合計	65	42	23	11	6

は警報　　は注意報　　「空欄」：患者発生数 0

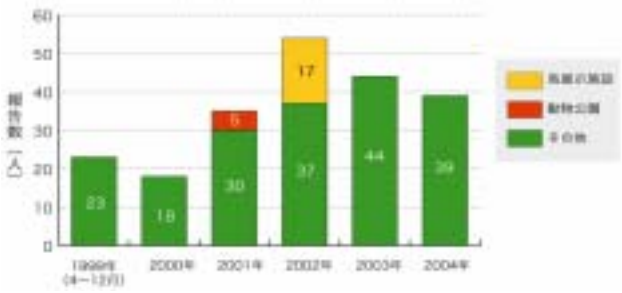
Ⅲ　表Ⅱ以外の感染症法対象疾患　（18 年計には、今回届出された人数を含む）

（51）後天性免疫不全症候群(五類全数把握疾患)　弘前保健所管内：　1人　（18年計　1人）
（59）RSウイルス感染症(五類定点把握疾患)　上十三保健所管内：2人　弘前保健所管内：2人　（18年計　62人）
（82）ﾏｲｺﾌﾟﾗｽﾞﾏ肺炎(五類定点把握疾患)　八戸保健所管内：　4人　（18年計　35人）

感染症の窓　オウム病

図1. オウム病の感染様式と病態

図 2　全国の年次オウム病報告数



オウム病は、オウム病クラミジア（*Chlamydia psittaci*）による人獣共通感染症です。潜伏期間は 1～2 週間で、急激な高熱と咳嗽で発症し、全身倦怠感、頭痛、筋肉痛、関節痛などインフルエンザに似た症状を示します。重症化すると意識障害、髄膜炎や多臓器不全などをきたします。感染様式としては、主に病鳥の排泄物からのオウム病クラミジアの吸入ですが、口移しの給餌や噛まれて感染することもあります（図 1）。

感染症法での 2004 年までの報告数は 213 人で、2001 年に動物公園(5 人)で、2002 年には鳥展示施設(17 人)での集団発生が報告されています。また、過去 3 年間の年間報告数は、集団発生を除くと 40 人前後となっています(図 2)。

オウム病は本来トリの感染症で、トリは保菌していても一見健常ですが、弱ったときやヒナを育てる期間に排菌します。感染源の多くは、飼育されているオウム・インコ類ですが、野生の鳥類やハトも保菌している場合があるので注意が必要です。

＜国立感染症研究所ホームページより一部転載、参考：感染症の診断・治療ガイドライン 2004＞